

資料

米国のポピュラー音楽ミュージアムと アーカイブに関する事例調査（その2）

杉 本 舞

Report on archives and a museum on popular music in the United States (No.2)

Mai SUGIMOTO

Abstract

This paper is a report on Country Music Hall of Fame and Museum (Nashville, Tennessee) and interviews with the director and archivists at Center for Popular Music, Middle Tennessee State University. The interviews are about organization issues and financial issues on the research center for popular music and technical issues on organizing archives of audio materials.

Keywords: museum, archive, library, digitization, popular music, country music, audio materials, copyright, the United States of America

抄 録

本稿は、米国におけるポピュラー音楽アーカイブの現状を把握するために行った、見学と聞き取りの調査記録である。大学付属の音楽アーカイブ構築に関する問題、資料の収集と保存、研究所の運営などについて聞き取りを行った。

キーワード：博物館、アーカイブ、図書館、デジタル化、ポピュラー音楽、カントリー音楽、著作権、アメリカ合衆国

1. はじめに

本稿は、ポピュラー音楽ミュージアム、および大学に所属する研究所の音楽アーカイブに関する調査記録の一つである。米国では各地にポピュラー音楽に関するミュージアムが存在し、大学にポピュラー音楽に関連するアーカイブが設置されている事例もある。関西大学ポピュラー音楽アーカイブ・ミュージアムプロジェクトは2014年に開始したが、プロジェクトを進めるにあたっては、先行事例の調査をふまえて運営上の問題について整理し、音楽ミュージアムのありかたについて知見を積み重ねる必要がある。今回の調査では、米国内のポピュラー音楽研究で30年以上の歴史のあるミドルテネシー州立大学（Middle

Tennessee State University, MTSU) のポピュラー音楽研究所 (Center for Popular Music, CPM) と付属のアーカイブ (米国テネシー州マーフリーズボロ) を訪問して見学と聞き取りを行ったほか、カントリーミュージック・ホール・オブ・フェイム博物館 (Country Music Hall of Fame and Museum) の見学を行った。

訪問および聞き取りは筆者一人で行い、許可を得て録音機器を使用し、記録を残した。使用言語は英語であった。調査内容にあり得べき誤謬は、すべて筆者に帰するものである。また本調査の一部は、平成28年度関西大学在外研究員制度による助成を受けたものである。

2. Center for Popular Music, Middle Tennessee State University 訪問記録

調査の状況

CPM は、米国テネシー州ナッシュビルから約35マイル離れたマーフリーズボロ市にあるミドルテネシー州立大学のキャンパス内に設置された研究所である。この研究所は、アーキビストやライブラリアン、エンジニアを含め約7名のスタッフで運営されている。筆者は2017年1月25日に現地を訪問し、所内を案内してもらいながら聞き取りを行った。対応者は所長の Greg Reish 教授、アーキビストの Rachel Morris 氏、エンジニアの Martin Fisher 氏であった。また聞き取りには、訪問時にミドルテネシー州立大学でポピュラー音楽史を研究していた永富真梨氏が同席した。

研究所の位置づけと施設、財政状況について

CPM は1985年に MTSU 内の研究所として設置され、2009年に MTSU のメディア・エンターテインメント学部 (College of Media and Entertainment) の一部門となった。メディア・エンターテインメント学部は、電子メディアコミュニケーション (Department of Electronic Media Communication)、ジャーナリズム (School of Journalism)、レコーディング産業 (Department of Recording Industry) の三つの部門で構成されており、CPM は学部での教育・研究にも貢献するという位置づけとなっている。

設置場所は John Bragg Media and Entertainment Building の1階と半地下の一部分となっている (図1)。研究所の入り口は建物内のパブリックスペースにある。研究所内では、1階部分に受付と閲覧スペースおよび図書配架スペースが設置されている。受付横の通路の奥には、アーキビストやエンジニアの作業室が設置され、最奥部にアーカイブ (半地下を含めた2階建て) が設けられていた。なお、John Bragg Media and Entertainment

Buildingの1階には、10万ワット出力のFMラジオ局 WMOT-FMの放送スタジオがある。WMOT-FMには開局以来45年以上の歴史があり、大学スポーツやジャズなどの番組などに加え、アメリカーナのライブ録音番組なども放送している¹⁾。CPMもアーカイブに保存されている歴史的音源を流す番組を昨年開始し、このラジオ局から放送しているということであった。



図1 Center for Popular Music John Bragg Media and Entertainment Building 外観

CPMはテネシー州の公立大学システムにおける“Center of Excellence”（CoE）のひとつに指定されている。MTSU内のCoEは、CPMのほかには「歴史的保存センター（Center for Historic Preservation）」の1か所のみである。CPMはCoEに指定されているおかげで、大学だけでなく州からもかなりの額の予算を得ているということであった。またCoEに指定されていることで、年度をまたいだ予算の繰り越しをすることもできる。加えて予算の使い方はセンター内で独自に決定でき、大学当局側にコントロールされることがない。これはCoEに指定されていない大学内の他の部局ではできないことである（他部局の場合だと、学部長（Dean）や学部決定権がある場合が多いとのことであった）。CPMは2009年以來メディア・エンターテインメント学部内の一ユニットという位置づけであるが、以上の理由で予算面では独立を保っているということであった。また、研究所内に図書配架

1) なお、アメリカーナ音楽協会（Americana Music Association）の本部はナッシュビル近郊のフランクリンにあり、その隣のホールで毎週収録されるライブがこの番組で放送されているということである。（<http://musiccityroots.com/> 最終閲覧日2017年5月8日）

スペースと蔵書があるが、大学図書館システムの一部という位置づけにもなっていない。

なお州と大学からの予算は、基本的には研究所とアーカイブの運営維持のために用いられており、デジタル化や資料の整理のための資金はプロジェクトごとにグラントを取っているということであった。企業や個人からお金の寄付は今のところは受けていないが、これから考えるべき項目とのことである。しかし、Reish 所長は企業からの資金はグラント同様、個別のコレクションのために受けるほうが良いだろうという意見であった。

いずれにせよ、資金状況は現在のところ非常によい状態が続いているが、CPM はかなり幸運な例ということであった。

図書配架スペースと閲覧スペース

研究所に入ってすぐ左手に閲覧スペースがあり、その奥に図書配架スペースが設けられている（図2）。この配架スペースに置かれているのは、基本的にはポピュラー音楽史の参考文献（二次文献）である。図書の閲覧、およびアーカイブ内の一次文献の閲覧はこの閲覧スペースで行う。いずれの資料も持ち出しは禁止である。録音資料についてもここで閲覧を行えるよう、音源聴取のための機器が設置されている。この閲覧スペースでは、レコーディング産業専攻の学生のための授業のほか、新刊著者の講演会やミュージシャンによるワークショップなど、CPM 主催のプログラムや催しも行われる。ただし、収容人数が35名程度なので、多数の参加が見込まれるコンサートやワークショップの場合は、別の場所を借りることとなる。



図2 Center for Popular Music 受付と閲覧室、および書架

CPMがおこなったワークショップには、たとえばエジソン型蓄音機を用いたシリンダー録音の実践などがある。フィドル奏者で歌手のアリソン・クラウス（Alison Krauss）氏や、パンチブラザーズ（Punch Brothers）もシリンダー録音を行ったとのことであった。パンチブラザーズの場合は、マーフリーズボロに立ち寄る時間がなかったため、ナッシュビルのライマン公会堂のバックステージに機器を運んで録音が行われたという。こういった実践は、CPMのYouTubeチャンネルで公開されている²⁾。

アーカイブと取扱われている資料

研究所の受付の奥にアーカイブスペースが設置されている。半地下を含め、ほぼ2階分の高さの空間であり、中央に設けられた通路を境に、右半分には可動式の集密書架が設けられている。左半分には階段と中2階ふうのフロアがしつらえられ、背の低い書架を1階部分と中2階部分にそれぞれ設置し、空間を効率的に使用できるようになっている。

アーカイブでは、毎日朝夕に気温と湿度の記録を取り、できるだけそれらの変化のないように加湿器や除湿器なども用いて調整を行っている。特に湿度は雨の量などで変化することが多いが、資料のなかでも特にテープ類はそういった気温や湿度の変化に弱いので注意が必要ということであった。火災に備えたスプリンクラーも設置されているが、平時に水漏れによる資料の破損が起きないようにドライパイプシステムが採用されており、火災時にのみバルブが開き、スプリンクラーに通じるパイプに水が流れ込むようになっている。また、万一の洪水と浸水に備え、資料類はすべて床から離れた状態で保管している。なお、この地域には竜巻（トルネード）が発生することがあるが、保管庫は半地下であり、壁は重いセメントブロックで作られているうえ、窓がないので安全ということであった。

安全面では、書架と書架の間に十分な通路を取ることが重要であり、収納性および保管環境と、資料の取り出しやすさとのバランスを考慮する必要があるとのことであった。CPMでは災害時のマニュアルがあらかじめ策定されており、災害時の作業の優先順位なども決められている。この災害時対策マニュアル（Disaster Plan）はウェブサイトで公開されている³⁾。また資料保管庫には災害時用道具箱（Disaster Box）が常備され、緊急時の清掃作業などに必要な道具類がおさめられている。定期的に訓練も実施されているということである。

2) CPMのYouTube公式チャンネルのURLは以下の通りである。<https://www.youtube.com/channel/UCOfX1UYC6zyfI60UqLShA>（最終閲覧日2017年5月8日）

3) CPMの災害時対策マニュアル http://popmusic.mtsu.edu/CPM_DISASTER_Plan_2011.pdf（最終閲覧日2017年5月8日）

あった⁴⁾。

このアーカイブで保存されているのは貴重書を含む一次資料である。取扱う範囲は、広義の米国のポピュラー音楽全般であり、クラシック音楽を除く、あらゆるフォーク音楽ジャンル、商業音楽ジャンルが対象である。テネシー州という立地の関係上、南部の音楽には力を入れているが、それに限られるということではなく、ジャズ、ロック、カントリー音楽、フォーク音楽、シアター音楽といった多様なジャンルを取り扱っているとのことであった。時代は、アメリカ植民地時代の18世紀以降が対象であるため、アメリカ植民地時代のゴスペル、聖歌もコレクションに入っている。米国以外にも、イングランドのバイオリン関係のコレクションや、日本で出版されたカントリー音楽関係の雑誌も収蔵されている（日本人から寄付があったとのことである）。全米に大学付属の音楽研究所は他に存在するが、取り扱う音楽ジャンルを限っている研究所が多いため、資料の収集範囲ではCPMがもっとも広いということであった。

紙の資料について

アーカイブに入っている音楽関係書籍は、貴重書や一次資料扱いのものである。貴重書には、たとえば18世紀末のアメリカ教会音楽の本、19世紀末から20世紀初頭に出版された南部のゴスペル音楽の楽譜、19世紀のシェイプ・ノート聖歌集のコレクション、楽器の奏法に関する古書、世俗歌の本などがあり、専用の書棚に保管されている。古い書籍には東海岸で出版されたものが多く、20世紀にさしかかるとアーカンソー州やテキサス州など南部で出版されたものが増えるということであった。他には、ナッシュビルのライマン公会堂の古い座席表、ピアノロールなどもコレクションに入っていた。

その他の一次資料は、可動式の大型集密書架に保管されている。これらは、アーティストや音楽産業に従事する人々、研究者から寄贈された資料がほとんどである。研究所設立初期にはコレクションを購入することもあったそうだが、いまは個別の貴重書を購入することがあるほかは購入を行っておらず、コレクションはおおむね寄付ということであった。資料には写真、手書きノート類、業務文書、契約書類、文通資料、手書きの楽譜、ポスター、コンサートプログラム、広告類、レコード会社や楽器会社のカタログのほか、定期刊行物や雑誌も含まれる。写真は約3万枚が収蔵され、雑誌類はほぼ書架3つ分に及んでい

4) なお、ナッシュビル中心部に位置するミュージシャンの殿堂博物館（Musicians Hall of Fame & Museums, 2006年設立）では2010年に発生したテネシー大洪水によって展示品に大きな損傷を受け、復帰に時間を要したとのことである（2017年1月26日に訪問したミュージシャンの殿堂博物館内の掲示による）。

た。ブルース、ソウル、ブルーグラス、カントリー、ブラックミュージックスタディに関する学術的定期刊行物のほか、ビルボードマガジンといった一般の雑誌も収蔵している。音楽産業関係のコレクションでは、たとえばRCAレコードの重役であったBrad McCuenの所有していた1960年代から1970年代の手帳や契約書類、録音業界で働いていた人の所有していた書類、あるいは音楽史研究者が収集していた資料が寄付されたコレクションなどがある。最近寄付されたものでは、20世紀初頭にティン・パン・アレーで出版されたものを含む78箱に及ぶ楽譜のコレクションもあるとのことであった。

録音資料について

資料保管庫には、様々なメディアの録音資料も保管されている。蓄音機用シリンダー、SP盤、LP盤、そのほか45-rpmのディスク、商用でないホームメイドレコーディング用ディスク、リールテープやカセットテープをはじめとする各種テープなどである。LP盤のコレクションは、処理が済んだものだけで約12万枚あり、これらはレコードレーベルのアルファベット順に整理されて収納されている。分類にはレーベルが用いているカタログ番号を利用している。現状では全てのレコードがCPMの電子データベースに登録されているわけではないため、利用者から個別のリクエストがあった時には、ディスコグラフィーを確認して保管庫で実物を探すという手続きとなる。テープのコレクションには公式に録音されたものでない音源も多く、たとえばフィドル奏者、バンジョー奏者として有名なジョン・ハートフォード（John Hartford）のカセットテープ5000本に及ぶ個人的録音などがそれにあたる。

研究者のリクエストに応じて、個々の資料のデジタル化を行う場合もある。特に、傷みやすい録音メディアの閲覧申し込みがあった場合には、その申し込みに応じてデジタル化を行い、現物ではなくデジタル化したデータから録音を聴取してもらうということを行っている。なお、映像資料の所蔵はそれほど多くないということであった。

録音資料の物理的保存、デジタルデータ保存といった取扱いは、保管庫手前の作業室でエンジニアのFisher氏がすべて執り行っている。作業室にはラジオ局から寄付された古い再生機などを含む機器類があり、録音資料のデジタル化に利用されている。Fisher氏は地元のテレビ局やラジオ局での長年に及ぶ勤務経験があり、退職後にその経験を生かして研究所のエンジニアを務めているという。CPMでは、映像資料はmpeg 2形式に変換し、録音資料はwav形式に変換して保存している。一旦デジタル化しても、将来フォーマットやメディアを変えて保存し続ける必要があるため、どのようなファイルも非圧縮で保存して

いるということであった。デジタルファイルは、MTSUのInformation Technology Divisionが維持しているコンピュータサーバー（同じキャンパスの別の建物に設置されている）に保存され、IT部門のスタッフによって毎週磁気テープでのバックアップが取られている。このバックアップテープはフットボールスタジアムの地下に設置された保管庫に保存されているが、今後ありうる災害に備え、マーフリーズボロ以外の場所での保存を現在検討中ということであった。

外部資金の獲得について

録音資料のデジタル保存プロジェクトは、原則としてグラント（外部資金）で行っている。グラントは、コレクションごとに、どの範囲の資料を対象とするかを明確にして獲得する。米国内には資料のデジタル化を対象としたグラントが何種類もある。その一例がグラミー財団のグラントで、支給上限は2万ドルである。最近CPMで獲得したグラミー財団のグラントは、インディアナ州ビルモンローブルーグラスフェスティバル（Bill Monroe Bean Blossom Bluegrass Festival）の古いライブ録音のリールテープ167本をデジタル化するというプロジェクトで、支給額は19500ドルであった。なお、このグラントで支給対象となるのは、データの保存とカタログ作成までとのことである。他には、アンドリュー・メロン財団が資金源となっている図書館情報資源振興財団（Council on Library and Information Resources）や、全米人文科学基金（National Endowment for the Humanities, NEH）のグラントがある。NEHのグラントでは、19世紀の手書き楽譜1700ページ分のデジタル化プロジェクトを行ったとのことであった。現在CPMでは未処理のコレクションが90ほど存在するため、所長が随時グラントを申し込んで、順に処理を行っている状態である。

著作権について

CPMでは出版されていない一次資料の場合、資料の寄付を受けた時点で、持ち主の権利を原則としてすべてCPMに移譲するという手続きを取っている。ただし、全権利の委譲とはならないケースもあり、そういう場合は個別に対処している。出版された資料については、CPMは権利を持っていないので、資料の使用者に各自で著作権処理をしてもらっている。米国では、パブリックドメインになっている音楽録音は著作権法上存在しないので、古い音楽の権利処理は非常に複雑になりうるとのことであった。

なお、CPMは独自にCDのレコードレーベルSpring Fed Recordsを所有している⁵⁾。これは、キャンノン郡にあるThe Arts Center of Cannon Countyで2002年に作られたレーベルを、2年半前にカタログや権利ごと引き継いだものである。CPMでは音源のコレクションから作成したCDをこのレーベルで発表している。たとえば、アーティストの個人的録音のシリーズを、資料を寄付した家族の了承を得てCDとして出版するなどであり、今後このプロジェクトは継続予定とのことであった。

まとめ

CPMは30年以上の歴史を持つポピュラー音楽の研究所であり、広範囲にわたる資料を長年かけて収集し、研究資源として提示する体制を整えていた。研究所自体を継続的に運営するための予算と、コレクションを整備するための予算をまったく別の資金源から得ることが運営上の特徴であり、テネシー州のCoEに指定されていることがこの体制を後押ししていると考えられる。また、専門技術を持つ常勤職員が技術面を支えていること、学部教育やワークショップ、CDなどを通じた多様なアウトリーチ方法をとっていることも特徴である。いずれにせよ、他のアーカイブ同様、寄付をうけた資料の整理・デジタル化には膨大な時間と人手、資金が必要であり、少ないスタッフ数でそれを効率的に進めることが課題とみられる。

3. Country Music Hall of Fame and Museum 訪問記録

調査の状況

カントリーミュージック・ホール・オブ・フェイム博物館（カントリー音楽の殿堂）は、米国テネシー州ナッシュビルのダウンタウンに位置する（図3）。この博物館は1961年にカントリーミュージック協会（Country Music Association (CMA)）によって企画されたもので、1963年に創設されたカントリー音楽財団（Country Music Foundation）が主体となって運営されている。最初に開館したのは1967年で、ナッシュビルのダウンタウンの南西にあるミュージック・ロウに位置していたが、2001年にナッシュビルのダウンタウンに移転した。2015年の年間入場者数は約108万人であり⁶⁾、2015年の収入の38パーセントが入場

5) Spring Fed Records のウェブサイト <http://www.springfedrecords.com/> （最終閲覧日2017年5月8日）

6) なお、この来場者数はクリーブランドに位置するロックの殿堂博物館の2倍を超える。

料、21パーセントがレストランである。また1年で8650万ドルの寄付を得ており、そのうち45パーセントは政府からの資金である⁷⁾。筆者は2017年1月24日に博物館を訪問し、通常の来館者と同様に内部を見学した。とくに案内者は依頼せず、ここでは聞き取りも行っていない。見学時間は約1時間半であった。内部は写真撮影可能であった（ただしフラッシュ撮影および動画撮影は禁止されていた）。



図3 カントリーミュージック・ホール・オブ・フェイム博物館外観

なお、この博物館にはアーカイブが併設されているため、電子メールで見学を申し込んだが、博物館側から返信を得ることはできなかった。また訪問時にアーカイブエリアを外側から見たが、内部にスタッフのいる様子もなかった⁸⁾。博物館内の掲示によれば、アーカイブには録音が20万点、写真が50万点、動画が3万点、楽器が数百、衣装が数千点、オーラルヒストリー、スクラップブック、手紙、ファンクラブニュースレター、楽譜、定期観光物、本などが収蔵されているとのことであった。

博物館は1階から3階までで構成されていた。1階にはレストランとミュージアムストア、イベント用ホール、チケット販売所があり、1階でチケットを購入した後に、その横のエレベータで3階に上がり、3階から2階の順で展示を見学するように設定されていた。

7) “2015 Annual Report”, <http://countrymusichalloffame.org/contentpages/about> (最終閲覧日2017年3月30日)

8) MTSUのReish所長に1月25日に聞いたところによれば、この博物館のアーカイブは研究者に向けた積極的な活動をあまり行っていないということであった。

3 階の展示（特別展）

エレベータを降りてすぐの場所に特別展スペースが2つ設けられており（図4の6番および7番）、順路の関係上、特別展を見てから常設展（図4の1番、2番、3番、4番）を見るように、ボランティアスタッフからアドバイスされる。この3階の奥には教育センター（Taylor Swift Education Center）があり、教室が2つ、テイラー・スウィフト（Taylor Swift）寄付の衣装なども飾られていた⁹⁾。

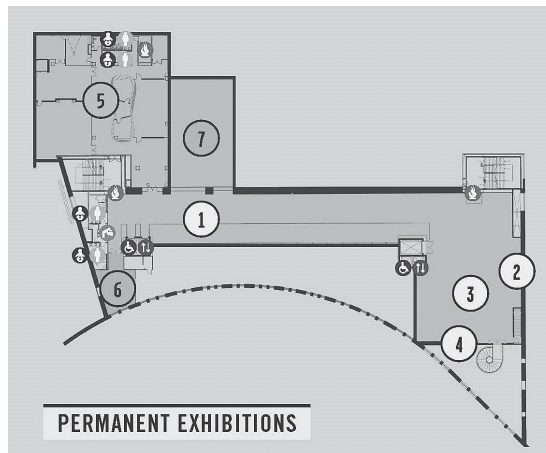


図4 カントリーミュージック・ホール・オブ・フェイム3階フロプラン

1つ目の特別展は「アラバマ：南部の歌（ALABAMA: Song of the South）」と題された、バンド Alabama の来歴をたどる特別展であった。スペース内には音楽付き映像が流されるコーナー（スクリーンと8人ほどが見られる立見席）が設けられ、この音楽が事実上のBGMの役割も果たしていた。映像は、Alabama のミュージックビデオ映像、コンサート映像、インタビュー映像、様々な授賞式映像などがつなぎ合わされたもので、長さは20分弱であった。筆者の訪問時には、60代前後と思われる複数の白人カップルが、歌を口ずさみながら映像を鑑賞していた。そのほかは、バンドメンバーの幼時以来のプロフィール、デビュー前のプライベート写真に始まり、1968年のバンド結成から解散までの主なヒット曲を、パネル展示と衣装や楽器などとともに振り返るスタイルの展示であった。ヒット曲の年表や、受賞トロフィー、ポスターなども展示されていた。

9) 出典： <http://assets.countrymusicchalloffame.org/pdfs/uploads/Visitor-Guide.pdf>（最終閲覧日2017年3月30日）

2つ目の特別展は「地元のザック・ブラウン・バンド (Homegrown Zac Brown Band)」であった。Zac Brown Band はジョージア州アトランタで2004年に結成されたカントリーバンドで、2010年以降にグラミー賞を複数回受賞している。こちらの特別展は、ガラスショーケースの中にトロフィー、衣装、楽器などを飾るスタイルであり、映像や音源は特になかった。

3 階の展示 (常設展)

3 階と 2 階は吹き抜け構造になっているが、吹き抜け沿いに奥に向かって常設展「歌って故郷に連れ戻してくれ：フォークのルーツから1960年代まで (Sing Me Back Home: Folk Roots to the 1960s)」が展示されている (図4の1番)。この常設展は、カントリー音楽のルーツを見るという趣旨で、19世紀から1960年代までの展開を時系列に追う。展示は、パネルでの説明と、8個のガラスケースに及ぶ楽器や衣装、楽譜、映像などで構成されていた。

古い時代については、19世紀のフォークソング、教会音楽などに用いられた楽器や楽譜が展示されており、ブルース、ラグタイム、ジャズなどを通じたカントリー音楽に対するアフリカンアメリカンの影響力について言及があった。なお全館を通じて黒人に関する展示はこの1か所のみであった。その後は、1920年代のレコード市場の拡大と、南部のストリングバンドの紹介、1930年代から1940年代にカウボーイと関連付けられたカントリー音楽の姿、1940年代におけるラジオ番組でのカントリー音楽の成功とナッシュビルの録音産業の勃興、カリフォルニアにおけるカントリー音楽の流行、テネシー州メンフィス出身のエルビス・プレスリーの登場、そしてロックンロールと差異化をはかる形で創設されたCMA、およびナッシュビルサウンドの興隆という流れで展示が作られていた。

この一連のガラスケースおよびパネル展示の向かい側の壁に、スクリーンに古い映像を流す映像コーナーが4か所設けられていた。このコーナーでは四角い指向性スピーカーが頭上からまっすぐ吊るされており、映像の説明板の前に立つとちょうど音声聞こえ、他の場所では音があまり聞こえないように工夫がなされていた。映像の内容は、1929年のHill Billy Folksのダンスや歌、アーカイブの紹介 (レコードのデジタル化など)、1930年代から1940年代の西部におけるカントリー音楽、1950年代半ばにラジオ番組「グランド・オール・オプリ (Grand Ole Opry)」に所属していたミュージシャンによる演奏などであった。映像はそれぞれ5分ほどの長さで、繰り返し流されていた。

常設展の奥のスペース (図4の2番から4番付近) には、プレスリー所有の自動車やピ

アノ、ミュージシャンたちが所有していた楽器類、1969年から20年間放送されたテレビ番組 HEE-HAW のセット、ナッシュビルのラジオ局 WSM-AM で用いられていたレコーディングコンソール、アメリカレコード協会からゴールドディスク認定を受けた854のアルバムの展示のほか、ミニシアターとキオスク（Kiosk）が設置されていた。

ミニシアターは「チャンネルを変える：テレビの中のカントリー音楽を見る（Changing Channels: A Look At Country Music On Television）」と題された一角で、40名ほどが着席できるようになっており、2000年代に至る過去50年の様々な映像が数十秒ずつ切り替えながら流される。内容はライブ演奏、ミュージックビデオ、ドラマ、音楽番組、アニメ番組などで、歌詞には全て字幕が付けられていた。全体の長さは10分強であった。

キオスクコーナーは、アーカイブへの入り口の横に設置され、「立ち止まって見聞きしよう：アーカイブアーケイド（Stop Look and Listen: The Archive Arcade）」と題されている。計10台のタッチパネル式キオスクが椅子とともに設置され、来館者は座ってキオスクに触れることができる。ヘッドフォンはなく、音声は天井の指向性スピーカーから出る。隣の席は近いが、隣のキオスクの音は気にならない程度であった。キオスクに設定されたプログラムは“Archive Photo Portfolio”, “Rare Record Spins”, “Country Comedy”, “Styles Onstage for kids”の4種類である。プログラム“Archive Photo Portfolio: Country Performances, Stars Offstage, Portraits through Time”では3つのカテゴリから写真を閲覧できる。1カテゴリごとに25枚のサムネイルがあらわれ、タッチすると大きな画像と2～3行の短い説明も読めるというものである。“Rare Record Spins”は、アーカイブ所蔵の45-rpm および78-rpm のレコードの一部を聞ける。用意されたレコードは21枚であり、歌を聴きながら、3行ほどの簡単な説明が読むことができる。“Country Comedy”は、1950年代から1990年代に製作されたカントリー音楽にゆかりのあるコメディアーを6作品紹介するものである。“Styles Onstage for kids”は子ども向けプログラムである。カントリー音楽のステージで用いられる衣装が、しばしばアーティスト本人のパーソナリティや歌詞に関連付けられていることを過去の事例（写真や歌、1930年代から80年代まで）で学んてから、自分なりに衣装をデザインしてみるというゲーム形式のプログラムであった。いずれもアーカイブ所蔵資料のごく一部を提示したものと考えられ、同種の博物館であるロックの殿堂博物館（米国オハイオ州）に設置されていたキオスクと比較しても、アクセスできる写真や音源、添えられた解説ともかなり小規模なものであった。

順路に沿って2階に降りると、まず特別展スペースとなる。筆者の訪問時には、ボブ・ディランのノーベル賞受賞を記念した特別展“Dylan, Cash, and the Nashville Cats: A

New Music City”が開催されていた。展示の前半は一部の楽器やポスターを除けばほとんどがパネル展示であり、1960年代以降のナッシュビルの音楽シーンの歴史、ボブ・ディランが1960年代にナッシュビルで録音を行ったこと、またジョニー・キャッシュがテレビ番組を通じて様々なアーティストをナッシュビルに呼んだことの影響が述べられ、ボブ・ディランとジョニー・キャッシュが「ナッシュビル・キャッツ (Nashville Cats)」をはじめとしたスタジオミュージシャンのイメージを変革したと指摘する。展示の後半はキャッシュのテレビ番組の映像コーナー（8人ほどが立ち見できるスペース）と、ナッシュビル・キャッツの関わる音源を鑑賞できるコーナーなどで構成されている。後者はCharlie McCoyやLloyd Greenをはじめとした20名のスタジオミュージシャンの音源が6種類ずつ聞けるブースであり、備え付けのヘッドフォンで音源を鑑賞することができるというものであった。常設展で取り上げられているほとんどのアーティストがフロントマンであるのに対し、この特別展ではスタジオミュージシャンにも焦点が当てられているのが特徴的であった。

2階の残りの部分は、常設展、ミニシアター、ACM ギャラリーと体験コーナーで構成される。常設展「歌って故郷に連れ戻してくれ：1960年代から2000年まで (Sing Me Back Home; 1960s to 2000)」は3階の展示の続きにあたる位置づけであり、1960年代以降のカントリー音楽の歴史を追う。1960年代におけるロックとカントリー音楽の関係性、1970年代における原点回帰、1970年代後半から80年代におけるカントリーポップの興隆、テレビ番組やラジオ番組でのカントリーポップ人気、1990年代から2000年代における女性アーティストの活躍などが順に紹介される。

ミニシアターは“Prime Time”と題され、12名分の座席と立見席で構成されていた。ここでは1970年代以降にケーブルテレビと衛星テレビが現れた際に登場した、カントリーミュージックのミュージックビデオという新たなマーケットに焦点を当て、1970年代から2000年代に至るミュージックビデオの歴史を合計15本のクリップをつなぎながら紹介していた。ミュージシャンは歌うだけでなく演技するようになり、1990年代までにミュージックビデオにはストーリー仕立てのものが増え、インターネットの普及に伴ってナッシュビルでの音楽産業も映像面に注力するようになった、という説明が与えられていた。フィルムは約5分であった。

ACM ギャラリーは現在話題になっているアーティストの衣装や楽器の展示であったが、隣接する“Discover Your Country”と題されたエリアは体験コーナーとして構成されていた。このコーナーは音楽産業における様々な要素（ツアーやプロダクション、録音、衣装、アルバムカバー写真撮影など）についてのクイズに答えたり、実際に録音ブースで録

音したりしながら音楽産業の全体像を学ぶというものであり、クイズをすべてこなすと記念品がもらえるという仕組みをインセンティブにして来場者の参加を促していた。なお、クイズは低年齢のこども向けのものもあれば、大人でないと答えるのが難しいものもあり、レベルは様々であった。

まとめ

この博物館では、主に衣装や楽器・パネル展示を中心として、カントリーミュージックの歴史的背景を提示していた。特に衣装については、他の文化（西部劇など）との関係性や歌詞の内容との関連性を強調した解説がなされており、単に華やかな衣装を来場者に見せるだけでなく、カントリーミュージックにまつわる文化における文脈を丁寧に説明していた。子供向けの学習施設や体験コーナーにも注力し、できるだけ広い年齢層の来場者を想定していることが見て取れる。一方、映像資料や音楽資料の提示はいくぶん限定的であった。またキオスクや体験コーナーの多くが低年齢の来場者をターゲットにしていることもあり、音楽史の研究成果に基づいた専門的な解説は多くなかった。特別展と体験コーナーを除くと展示は主にフロントマンに焦点を当てていること、加えて取り上げられている人物のほぼ全員が白人であることも特徴的であった¹⁰⁾。

4. まとめ

CPMとカントリー音楽の殿堂博物館のいずれにおいても、歴史的資料の取り扱いを担当する人手の問題が示唆されているように思われる。CPMでは時間をかけながら資料の整理を行っており、カントリー音楽の殿堂博物館アーカイブでは、そもそも資料の利用すらスムーズにはいかない状態であった。また、いずれの機関においても、組織の維持においては公的資金の多大な援助を受けていることが明らかであった。一方、CPMのCDレーベルやラジオ番組にみられるような音源を用いたアウトリーチの手法、カントリー音楽の殿堂博物館における衣装の展示法など、保存している資料の提示方法には、今後日本で同様の企画を考える際に取り入れ得るものもありそうに思われる。

テネシー州ナッシュビルとその近郊という地理的要素は、ポピュラー音楽全般を対象と

10) この点については、MTSUの永富真梨氏より、1960年代におけるカントリーミュージックの殿堂博物館設立の経緯そのものが、カントリーミュージックの他領域との差異化、および定義づけに関わっている可能性があるという示唆を受けた。

するCPMでは比較的相対化され、単なるカントリー音楽の中心地としてだけではなく、南部の一部としてのテネシー州という位置づけも重視されていた。対して、カントリー音楽の殿堂博物館は、カントリー音楽の中心地としてのナッシュビル像に焦点を絞っているのが特徴的であった。この背景には、カントリー音楽の殿堂自体が、1950年代後半のロックンロールの発生と1960年前後におけるナッシュビルサウンド興隆の時期に創立されたという経緯があるものと推察される。

またテネシー州ナッシュビル近郊はこれまでたびたび洪水や竜巻といった自然災害に襲われており、保管している資料の保護と回復についても注意が払われていた。台風や地震といった大規模災害の多い日本でアーカイブを構築するにあたって、同様の課題について対応を考えておく必要があると考えられる。

—2017.6.23受稿—